中国の読書観

―聖人に近づく道―

福井佳夫

一

「何のために読書するのですか」と質問されて、もし誰かが「聖人に近づくため」と答えたとしたら、現代人はどう思うであろうか。恐らくは目を白黒させてびっくりするか、冗談だと思って聞き流してしまうか、どちらかではないだろうか。

だが、こうした答えが真実味を持っていた時代は、たしかにあった。日本の江戸時代の、しかめつらしい顔をした漢学者たちであったなら、恐らくこうした返事をする者は、一人や二人にはとどまらなかったであろう。事実、彼らにとっては読書の目的とは、理念的にはたしかに「聖人に近づくため」であるはずであった。

だが、こうした「聖人に近づくため」の読書の開祖は、実は日本人ではない。それは、お隣の中国の人々である。中国にあっても、読書の目的はもとより多様ではあったけれども、儒教を奉じる大多数の中国人にあっては、読書の中心的な在り方は、やはり「聖人に近づくため」のものであった。聖人とは中国人においては、知徳すぐれた最高の

人格者であるとされる。「聖人ハ人倫ノ至リナリ」（孟子離婁上）。聖人は、この世に現れた、もっとも完全にして無欠の人間であって、尋常の手段ではとても近づける存在ではない。そもそも、儒者の間では歴史はじまってこのかた、まだ八人しかこの地上には現れていないとされている。その八人とは、古い順に挙げれば、堯・舜・禹・湯・文王・武王・周公・孔子である。そして読書とは、この偉大なる聖人に近づくために、もっとも有効な手段なのだ。それゆえ、古い時代の中国の人々は、日々「聖人に近づくため」の読書に精励したのであった。ただし、これには若干の注釈が必要であろう。

まず第一に、何でも良いわけではない。「聖人に近づくため」の読書においては、読むべき書物がきまっている。それは、我々中国学を専攻している者が、経書と称している一連の儒教の聖典である。その経書の示す範囲は時と場合とによって多少の幅があるが、まずもっとも基本的な経書として誰もが指を屈するのは、五経（易・詩・書・礼・春秋）と四書（大学・中庸・論語・孟子）とであろう。これらあわせて四書五経と称される九つの聖典は、分かりやすい譬えで言えば、西洋世界の聖書に相当するものであり、中国ではとくに尊崇を受けている書物なのである。

これらの経書を読めば、なぜ聖人に近づくことができるのか。それは、これらの経書は「聖人ノ制作セルヲ経ト曰ウ」（張華博物志）、すなわち聖人が作ったものであり、「道義ノ淵海ナリ」（抱朴子）、つまり世界のあらゆる道義を集めた大文章であるからなのである。それは、譬えれば、あたかも天空に輝く星座、連ねた多くの真珠のごときものなのだ。「粲（さん）トシテ宿（ほし）ノ如ク、落落トシテ珠（たま）ノ如シ」（顧子議訓）。つまり、聖人の作った経書には、宇宙のあらゆる神秘を解明する真理が含まれているはずであり、したがって、それを読めば完全な人間たる聖人に近づくことができるというわけだ。

第二の注釈として、たんに読み通すだけでは駄目であって、完全に暗記し、暗誦できるほどにならねばならない。「書ハ誦ヲ成サザルベカラズ」（宋名臣言行録司馬光）。文字どおり身となり肉となるためには、一度ざっと読み通すだけでは不可

能であることは言うまでもない。それゆえ、古い時代の中国人たちは、あたかもお坊さんがお経を唱えるかのように、日々経書の一句一句を口に出して暗誦し、暗記していったのである。五経と四書、手にとって見た人は知っているであろうが、四十五万字にのぼる膨大な量の書物である。それを彼らは日々、頭の中に詰め込んでいったのである。

第三に、こうした経書の暗記は、必ずしも無益なことばかりではなかった、ということを言っておかねばならない。もちろん聖人に近づいて無益であるはずがない。偉大な聖人に近づくことは、素晴らしいことであれ、無益であることなどあり得ない。だが、私がここで言いたいのは、そうした高尚な次元のことではなく、ごく世俗的なレベルでも、聖人に近づくことはプラスが多いということなのである。端的に言えば、銭になるのだ。

中国の人々は、先述したごとく、膨大な量の経書を暗誦するが、実はこうした行為は終極の目的ではない。次なる段階に至るための、過渡的な準備作業に過ぎないのである。経書を暗誦し終わった人々は、通例は次に科挙という試験にチャレンジする。この科挙の試験に合格してこそ、自分が聖人に一歩近づいたことの明確なあかしとなるのだ。この科挙とは、現在風に言えば、国家公務員上級試験の如きものであり、その難関ぶりは、つとに宮崎市定氏の名著『科挙』（中公新書・文庫）で知れわたっている。科挙の受験システムは、第一段階の地方試験（これにまた何段階かある）、次に第二段階の「郷試」、そして第三段階の「会試」、時代によってはさらに「殿試」が加わるという具合に、何段階かの試験を経て、次第に高次のレベルへと進んでゆく。それは、出題内容・採点方法とも極めて厳密かつ公正なものであって、まぐれ当たりということを許さない、当時としては極めて優れた官僚のリクルートであった。

だが、一旦その試験に合格したならば、名誉はもちろん、高位高官への道が約束され、富裕な生活が保証されているのだ。うまくいけば、中央官庁でキャリアとして華々しい活躍が期待できるし、うまくいかなくても、地方の知事くらいのポストは確実である。「官ニ升リテ財ヲ発ス」（高官にのぼってお金を儲ける）、「三年ノ清知府、十万ノ雪

花銀」（三年間地方の知事をすれば、どんな清廉な者でも莫大な浄財がたまる）。こうした、民間にもひろく流布したことわざは、官僚が中国ではいかにみいりの良い地位であったかを、如実に物語っている。ありていに言えば、当時の若者たちは「聖人に近づく」ことよりも、この科挙に合格することを夢みて、日々経書の暗誦に励んだのである。

勧学歌

富家不用買良田　金持ちになるにゃ田んぼは要らぬ
書中自有千鍾粟　書物の中にたんまりお米がうなってる
……　……
娶妻莫恨無良媒　べっぴんが欲しけりゃ仲人の世話は要らぬ
書中有女顔如玉　書物の中でめんこいおなごが手招きしてる
男児欲遂平生志　お前さん　欲しいものがありゃ
六経勤向窗前読　せいぜい窓に向かって経書を読むことさ

やや俗っぽく翻訳したが、「金持ちになりたければ、そしてきれいな妻が欲しければ、経書を読め」と言っているのは、科挙の受験生ではない。宋の天子、真宗その人である。馬の鼻先に人参をぶらさげる農夫よろしく、皇帝みずから「美しい妻が欲しければ、読書して科挙に合格せよ」と、科挙の旗振り役を買ってでているわけだ。「書ヲ読メバ万倍ノ利有リ」（古文真宝王荆公観学文）という言葉は、本来は形而上的な意味を持たせた発言であろうが、形而下的な意味でも正しかったのである。

こうした、科挙合格への異常なまでの熱意は、中国の社会に大きな社会的現象を引き起こすに至った。地元の名士や科挙受験生たちは、各地に書院や文人結社を組織して、科挙合格を目指して互いにしのぎあった。また、それらの結社は、同時に浪人の生活を守るために、受験者向きの参考書を数多く出版したが、なかでも予想問題や模範答案の類は、常にベストセラーの上位を占め続けたのだった。そうした受験参考書の一つ、張溥『漢魏六朝一百三家集』などは、古い時代の名文（科挙の必須科目たる論説文の書き方を習得するために、経書以外にこれらも読んでおく必要があった）を要領よくまとめたもので、現在でも中国文学研究者が使用しているほどの、便利な書物なのである。また科挙は、時には政治とも密接な関係を持つこともあった。明代においては、宦官と反宦官の政治勢力が、ともに自派の勢力を増そうとして、科挙合格者の数を競いあい、科挙の合否は政治闘争の様相を呈するほど、白熱化するに至ったのである。まさに上から下まで、すべての人々を巻き込んでの科挙狂騒曲が、古い中国では鳴り響いていたのだ。

二

それゆえ、「聖人に近づくため」の読書といっても、実は名目だけのもの、と言って悪ければ、理念の上でのことであって、実質は自らの立身出世のためのものであった。つまり、中国では、「聖人に近づくため」の読書とは、実際はほぼ科挙の受験勉強に等しく、立身のための手段であったのだ。すると、読書がそんなに実利的で俗っぽいものであっては、本当に聖人に近づくことはできないのではないか、という疑念が起こるかもしれない。だが、結論的に言えば、そうした疑念は当を得たものではない。中国では読書と実利とは相反するものではなく、むしろ極めて仲が良かったのである。つまり、聖人に近づくために読書したひとは、やはり普通の人間よりも高い位置にいる。すると、そうした一歩でも高い位置にいる人は、尊敬されてしかるべきだし、また出世して恵まれた生活をするのは当然だ、

という素朴な考え方があったのである。

したがって、中国ではただ書物が読めるというだけでも、なにがしかの価値を有しているのだ。中国には「読書人」という呼称があるが、この言葉は単なる読書を好む人というにとどまらぬ、強いエリートの香りをただよわせた美称なのである。聖賢の書物を読めるということ自体が、特別な選ばれた人間であることを証明する、ステイタスシンボルなのだ。この読書人は、また「士」或いは「士大夫」とも呼ばれ、書物を読めない一般民衆、すなわち「庶」とは区別される。読書によって一歩聖人に近づいた彼らは、天下国家に責任を負うエリートであり、常に尊敬され、かつさまざまな社会的特権を享受し得る存在なのだ。中国において、支配者階級をかたちづくった層は、常にこうした読書人たちなのであった。つまり、中国では血統や門地ではなく、読書が可能かどうかで、社会的身分が決められたのである。中国の支配者階級の人々が、常に文人であり続けた理由は、こうしたところにある。中国は、プラトンのいう哲人政治の理想に近い、いわば文人政治が実際に存在し、常態となった世界であったのである。

そうした、個々人の読書能力が問われる社会では、社会的身分も固定的なものではあり得ない。たとえば、ある人が読書人として広く社会的尊敬を受ける存在であったとしても、もしその息子の出来が悪くて、書物が読めなければ、その息子はもう読書人とは呼ばれない。逆に農民の息子であっても、もし何かの機会を得て読書ができるようになれば、その息子は農民出身ではあっても、読書人の仲間入りができるわけだ。こうした制度が中国では八・九世紀の頃より始まっている。つい前世紀の中頃まで、武士の子は必ず武士であり得た日本と比べると、中国はかなり早い時点で、社会的身分の流動化に成功しており、風通しのよい社会であったのだ。その意味で「歴代書香ノ家」（代々読書人を輩出してきた家）は、とくに中国では尊崇の対象となるのである。

こうした、読書すればよい地位につけ、豊かな生活をおくることができるという考え方は、すでに紀元前六世紀の

頃より始まっている。すなわち、紀元前六世紀に生を享けた中国最後の、そして最大の聖人、孔子（BC五五二～四七九）こそは、こうした「聖人に近づけ、かつ銭にもなる読書」を強力に推奨した人物であった。孔子曰く、「学べバ祿ハ其ノ中ニ在リ」（論語衛霊公）。この場合の「学ぶ」は、書物を読誦することに等しい。読書し、そして聖人の道を学べ。そうした誠実な営みの中においてこそ、経済的幸福はもたらされるのだ。孔子は、こう言って弟子たちを鼓舞し続けた人なのである。

読書によって聖人に近づけ、科挙に合格することによって、支配者階級に仲間入りできるという考え方は、中国に努力主義の土壌を切り開いた。中国、とくに科挙による人材登用が本格化した八・九世紀以降の中国においては、人間修養のためには、特別な苦行や観想は必須でなく、また立身のためにも、門閥や武力は有効な方法ではなかった。ただ読書という比較的単純な仕事に専念しさえすれば、聖人にも近づけ、立身も思うがままなのだ。この孔子の教えを承けて、孔子の弟子たち、すなわち後世の儒者たちはひたすら読書に励み、完全な人間たる聖人に近づこうと念じた。そうした努力が、同時に経済的成功へ近づくことでもあれば、読書への熱意も高まらざるを得ない。「謂ウコト勿カレ、今日学バズシテ来日有リト」（古文真宝朱文公勧学文）「読誦シテ昼夜絶エズ」（東漢観記）「錐ヲ引イテ股ヲ刺ス」（戦国策秦策）（錐で太腿を刺して、眠気を追い払って読書に励む）。かつて「蛍の光」「窓の雪」が我々日本人を励ましてくれたように、中国においても、この種の読書に関する古人の逸話が、科挙の受験者たちを鼓舞したに相違ない。

ただ残念なことに、後世の儒者たちは、「読書→聖人に近づく→経済的成功」と続く上昇階段において、往々にして中間の「聖人に近づく」階段を飛び越してしまいがちであった。儒者という呼称が、あまり良いイメージを持たなくなった原因の一つは、孔子の学統を継いだ儒者たちが、しばしばこの大切な「聖人に近づく」ステップを踏みはずしたことにあるであろう。「読書」と「経済的成功」とが直結してしまっては、孔子の意図は無視されたに等しいのだ。

三

上に述べてきたごとく、読書が非常に重視される社会であれば、読書という行為に崇高な色あいを加味したくなるのは、人情である。たとえば、儒教における厳格主義の祖とも言うべき朱子は、いかにも彼らしく「書ヲ読ミテ以テ聖賢ノ意ヲ観ルベシ」（朱子全書 読書法）と言い切っている。こうした読書観に立てば、読書は必然的に人間修養の一法と考えられるようになって、その価値はいや増してくるであろう。中国で、聖人に次ぐ理想的な境地に到達したとされる君子とは、常に読書人であることを前提としている。君子は「前言往行ヲ識シテ、以テ其ノ徳ヲ蓄ウル」（易経大畜象）（聖人の言葉や行いを学びとって、自分の徳をみがく）ことを以て、その任務としているのである。読書をしない君子、文字を読めない君子という存在はあり得ないわけだ。かくして「書ヲ読ミテ聖賢ヲ見ザレバ、鉛槧ノ傭ト為ル」（菜根譚前集五十六）（書を読んで聖賢の心を読み取らなければ、印刷屋の使用人と同じことだ）とか、「子ニ黄金満籯ヲ遺スハ、一経ニ如カズ」（漢書韋賢伝）（子孫に多くの黄金を遺すよりも、一冊の経書を遺した方がよい）のごとき、読書の価値を称揚する言葉が、読書人の間で実感を持って語られるようになるのである。

こうした読書重視の考え方は、一般の読書人に限らず、君主にあっても同じであった。中国では、政治を執るほどの人なら、かならず読書によって、自己の徳性をみがいておかねばならない。そのすぐれし徳性によって、無学な民衆を感化し、正しき方向へと導いてやらねばならぬ。これが、中国でいう「徳治政治」、すなわち徳によって治める政治なのである。もし、国が乱れたならば、それは、為政者の徳望が至らないからなのだ。「徳有レバ以テ興リ易ク、徳無ケレバ以テ亡ビ易シ」（十八史略 西漢高祖）というわけである。

ところが、現実にはいくら書物を読んでも、必ず報われるとは限らない。個人的な立場で言えば、いくら経書を読

誦しても科挙に合格できない場合だってあり得るだろうし、また、より高い立場で言えば、いくら天子が読書に励んで徳性をみがいても、国が栄えるとは限らない。たとえば、紀元六世紀、中国の北半分を遊牧民族に支配されていた時期に、漢民族の伝統と文明を守った南方の梁王朝では、中国歴代を通しても、屈指の文学者として通用するほどの、読書好きの天子が輩出した。梁の武帝、簡文帝、元帝、これに皇太子のまま夭折した昭明太子（詩文集『文選（もんぜん）』の編者として著名）を加えれば、梁王朝がいかに理想的な文人皇帝を輩出したかがよく分かろう。だが、それにも関わらず、この王朝はわずか五十年あまりで、北方の剽悍な西魏王朝の侵攻によって、あえなく潰（つい）えてしまったのである。

その梁王朝の最後の天子、元帝は、いよいよ西魏の軍勢が宮中に迫った時、苦心して収集した古今の書籍十四万巻を、ことごとく火に投じて焼いてしまった。そして、次のように歎いたという。「書ヲ読ムコト万巻ナルモ、猶オ今日有リ」（十八史略。南北朝梁）せっかく万巻の書物を読んでも、ついにこのような運命になってしまうのか。この梁の元帝の悲痛な言葉は、読書に励んで名君主たらんと欲しながら報われなかった、誠実な一君主の無念の気持ちを、端的に物語っている。だが、それとともに、この悲痛な歎きの中には、元帝の心の奥底に存在する「読書」への強い期待が窺われよう。日本の奈良時代においては仏教が流行し、仏法の力で国を守る、つまり「鎮護国家」の思想が強力だったが、それになぞらえて言えば、中国では理念的には、読書による鎮護国家を期待していたのである。読書に励んで聖人に近づいた君主とその王朝が、野蛮なる武力国家に滅ぼされるはずがないと。梁の元帝の絶望的な発言には、そうした読書への期待が裏切られたことに対する歎きも、幾分かは含まれているであろう。

そうなのである。実際、読書をしたって、現実にはむしろ報われないことの方が多いのだ。科挙の競争は、少数の成功者とそれに数百倍する、否、数千倍するであろう失敗者を生んだ。一生、受験浪人のまま死んでいった読書人はかぞえきれない。その哀れな末路は、中国近代の文豪、魯迅によって「孔乙己（コンイーチー）」という短編小説でリアルに描かれて

いる。

魯鎮の居酒屋には、夕方時分になると、多くの職人たちがやってくる。彼らは仕事をすました後にやってきて、銅貨四文を払って一杯の酒を買う。そして、立ったままスタンドにもたれて、豆などを食いながら熱いところをひっかける。こうして一日の疲れを癒すわけだ。

この居酒屋に、ときどき一風変わった人物がやってくる。十年以上も洗ってないような汚れた長衣を着て、髭をぼうぼうに生やした男、孔乙己がそれだ。彼はどうしたわけか、人と何か話をするときは、二言目には「なりけりあらんや」とくるのだった。それで、客や店の主人たちは、それを面白がって、この孔乙己が店にくると、いつもからかって楽しんでいる。

「おい、孔乙己、また顔に傷がふえたな」「また人の本を盗んで、打たれたんだろ」。すると、孔乙己はむきになって抗弁する。「なんで、そんな、ありもしないことを」「窃書とは盗みとは申せん……窃書とはな、読書人の常じゃ。盗みと申せるか」。それから、急にむつかしそうに「君子固より窮す」（論語の一節）ときて、何とかで「あらんや」とくる。そこで、一同は大笑いとなるのだ。

この孔乙己は科挙の万年落第者であった。だから、時にかつて暗誦した経書の一節が口の端にのぼるわけだ。彼は何度も科挙失敗を繰り返し、ついに乞食同様に落ちぶれてしまった。文字が書けるので、時には筆耕の仕事も頼まれたが、飲んだくれの怠け者だったので、結局は誰からも相手にされなくなってしまった。今では、子供までこの孔乙己を、馬鹿にする始末なのである。

ある時、居酒屋の主人が節季勘定を始めていたが、突然「孔乙己はしばらく来ないな」とつぶやいた。すると、ひとりの客が言った。「こられるものか。あいつは丁挙人（科挙合格者）の家のものを盗みだそうとして捕まっ

たんだ。夜中まで打たれ続けて、しまいにゃ足を折りやがったのさ」。主人「折られてどうなった」。客「知るもんか。死んだんだろうさ」。

秋風が立ち、冬のおとづれを感じさせるほど寒くなった頃、その孔乙己が不意に「一杯つけてくれ」と、その店にやってきた。見る影もなく痩せ衰え、ぼろぼろの袷を着て、這いながら店までやってきたのだ。「孔乙己、お前、またやったんだろ」という主人に、孔乙己は低い声で、「ころんだんだ。こ、ころんで」と懸命に弁解する。その声は、もう何も言ってくれるな、と主人に哀願しているようであった。出された酒をおいしそうに飲み終えると、孔乙己は破れたポケットの中から四文銭を出して手渡した。その手は、這ってきたために泥だらけになっていた。

「それから今まで、僕はついぞ彼をみかけない。——たぶん、孔乙己は死んだにちがいない」。魯迅その人を思わせる主人公の少年（居酒屋の手伝いをしている）の、こうした言葉で、この小説はあっけなく終わっている。十分足らずで読み終えてしまう、この文字通りの短編の小説は、短いながらも科挙落第者の哀れな末路を赤裸々に描いて、余すところがない。

魯迅がこの「孔乙己」で告発するごとく、凄絶なまでの科挙への受験努力は、人間性を破壊し、廃人に追い込むまでに激甚であった。すこし目先のきいた人間が確率的計算をしたならば、恐らく数百・数千分の一の成功率しかない科挙に挑むのは馬鹿げていると、すぐ気づいたに相違ない。とくに歴史を鑑（かがみ）として重視し、過去の経験より学ぶことを得意とする中国の人々が、そうした事実に気づかなかったはずがない。だが、それにもかかわらず、ごく少数の例外的な合理主義者を除いては、中国の知識人の多くは、科挙に挑むことをやめようとしなかった。極めて低い成功率であることを承知の上で、やはりあいも変わらず熱心に読書に励んだのである。

なぜ、かくほどまでに読書に励んだのか。やはり、その一番基底には「聖人に近づく」ことができる、という中国人独自の、読書への過大な期待があったからとしか、私には思えない。かりに科挙に合格できず、不遇なままで生涯を終わろうとも、やはり聖人の書を学び、聖人に一歩でも近づくことができたなら、それで本望だ。科挙の失敗者たちは、こう考えて自らを慰めたことだろう。こうした愚直なまでの、読書や聖人への憧れが、中国の読書人に共通した思いなのである。それゆえ、「書ヲ学ブハ急流ニ泝（さかのぼ）ルガ如シ」（蘇軾の語）であろうとも、君子の任務が「前言往行ヲ識シテ、以テ其ノ徳ヲ蓄ウル」ことである以上、やはり彼らは生涯をかけて「錐ヲ引イテ股ヲ刺ス」壮絶な読書に励むことを、やめなかったのである。

四

こうした、読書、とくに「聖人に近づくため」の読書こそが大切であるとする考え方は、当然のことではあるが、良いことばかりではなかった。時には、中国社会の発達に重大な阻害要因をもたらすことにもなった。

まず、第一に指摘せねばならぬ点は、この世のあらゆる神秘を解く真理が経書の中にあるとする考え方は、中国人から自分でものを考える習慣を奪いとってしまったことである。つまり、あらゆる真理がすでに経書の中に備わっている以上、もはや聖人ならざる後世の人間に、新しい真理を見出す余地がなくなってしまう。正しき真理はすでに聖人が発見してくれている、後世の者はそれをただ学べばよく、自ら苦労して思索する必要はない。こういった態度が中国では普遍的になってしまった。「聖人に近づくため」の読書においては、聖人の教えをただうやうやしく学ぶのみであって、経書の内容を批判することはもちろん、疑念を持つことさえ許されなかったのである。

私は西洋の読書論には詳しくないが、たまたま手近にあったショウペンハウエル『読書について』（岩波文庫）を

開いてみると、次のような言葉があった。

読書は思索の代用品にすぎない。読書は他人に思想誘導の務めをゆだねる。大抵の本の効用といえばその指導をうける人の前に、いかに多くの迷路が走っているか、いかにその人がはなはだしい迷いに陥るおそれがあるかを示すだけである。だが自らの天分に導かれる者、言い換えれば自発的に正しく思索する者は正しい路を発見する羅針盤を準備している。それで読書はただ自分の思想の泉が枯れた時にのみ試みるべきで、事実、最もすぐれた頭脳の持ち主もやむなく読書にふけることもよく見うけられることであろう。しかしこれとは逆に本を手にする目的で、生き生きとした自らの思索を追放すれば、聖なる精神に対する反逆罪である。……

ただ他人から学んだだけの真理は、我々に付着しているだけで、義手義足、入歯や蠟の鼻か、あるいはせいぜい他の肉を利用して整形鼻術がつくった鼻のようなものにすぎないが、自分で考えた結果獲得した真理は生きた手足のようなもので、それだけが真に我々のものなのである。（P7　思索）

ここには、思索を読書よりも高次なものとする考え方が、明らかに見てとれる。真理とは自分で思索して獲得すべきものであって、そうして獲得された真理こそが、真に自分のものとなる、という発想である。

だが、西洋の著名な哲学者がいう「読書は思索の代用品にすぎない」のごとき、読書を思索よりも下に置こうとする考え方は、中国では少数派でしかあり得ない。たとえば孔子は、次のように言う。「吾嘗テ終日食ベズ、終夜寝ネズ。以テ思ウ、益無シト。学ブニ如カズ」（論語衛霊公）。終日食べず、終夜眠らずの思索も、何の益ももたらさなかった。読書した方がよい。この孔子の発言は、必ずしも自分で思索することを全面否定するものではないだろうが、少なくとも後世においては、読書重視を説いた一節であると理解されてきた。この発言の底には、後世の人の任務は、聖人の教えをひたすら理解することにあり、自分で思索を深める必要はない、とする思索軽視への傾きが、たしかに窺えよう。

恐らく孔子自身は、自分で思索することをしなかった人ではあるまい。だが、「古キヲ温メテ新シキヲ知ル」論語為政と か、「述ベテ作ラズ。信ジテ古ヲ好ム」論語述而（聖人の教えを敷衍するのみで、むやみに自説を立てない。ただ古い聖人の教えを信じて、それを好むのだ）とか語っている孔子は、やはり基本的には、深刻な思索よりも、聖人が書き残してくれた経書を読誦することの方が、より生産的であることを信じていた人なのである。

こうした考え方においては、わが兼好法師の「ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる」徒然草十三段という言葉でさえ、中国にあっては、幾分か不遜な響きを持つであろう。読書は聖人の教えを学ぶためのものである。我々後世の者は、聖人の垂れる教えをただうやうやしく学ぶべきである。聖人を「友とする」とは、なんと不遜なことを言うかと。

こうした考え方は、学問の発展を阻害してしまう方向にはたらく。中国ではこうした考え方のゆえに、経書の範疇を逸脱した新しい学問の発達が、起こりにくくなってしまった。「聖人に近づくため」の極端な読書重視は、中国の文明、とくに近代文明の新しい発展を阻害するという、第二のマイナスを生んでしまったのである。

聖人の教えの中には、もとより近代科学の成果は含まれない。近代に西洋で起こった新しい文明を見ならおうにも、西洋文明を支える合理的思想が聖人の教えの中に含まれていない以上、中国人にとっては、それは真理ではあり得ないことになってしまう。かつて西洋で、キリスト教神学の前に、ガリレオが地動説をひっこめざるを得なかったような事態が、中国でも起こったのである。十九世紀、中国が西洋列強の半植民地となるに及んで、やむをえず西洋の近代科学を学ぶにしても、それが聖人の教えを逸脱した代物である以上、なにがしか消極的な態度にならざるを得ない。中国の近代化が日本などに比べると、はるかに後れてしまった原因のひとつは、こうした意識によるであろう。経書への絶対的傾倒が、かえって近代文明の発展を妨げてしまったのだ。

第三に、中国を論じる際によく指摘される中国人の保守性も、この聖人の教えを重視する考え方と無縁ではない。聖人が古代に現れ、経書もおおむね古代に書かれたことから、中国には、古代こそが理想の時代だとする尚古思想、すなわち古を尚し（たっと）とする考え方が定着した。これによって、進歩することよりも、後退して過去にさかのぼることの方がよい、とする考え方が、主流となってしまった。つまり、進歩的であることは、聖人の教えに背くことになりがちであったのである。「しきたり通りにすべきだ」、「古いやり方を変えることはまかりならん」。儒者と言えば、すぐ「頑迷固陋」という言葉が連想されるほど、その保守性が云々されるのは、こうした、堯舜のましませし古き時代こそが理想の世界であったとする、尚古思想と密接な関連があるのである。

五

以上述べてきたような中国の読書観は、現在の我々にはなかなか理解しがたいことかもしれない。わが国は、中国から多くの文物制度を輸入してきたが、幸か不幸か科挙の制度は導入しなかった。それゆえ、中国本土のようには、読書がそのまま直接に立身出世につながることはなく、読書への期待も、中国ほど過大なものにならなかったからである。近代以前の日本においては、やはり武芸や門閥の力によった方が、より確実でてっとり早い立身の道であったろう。

だが、そうした日本においても、やはりかの地の読書観は、我々のあまり意識しないところでしっかりと根をおろしている。読書を高邁なる行為とする思想は、立身とは直接的にはつながらなかったけれども、古い日本においても、やはり相当に強力であった。近代以前の日本においては、中国と同様、読書こそが正統的な学問の方法であるとされ、実験やフィールドワークは、重要な学問手段と見なされなかった。聖人に近づく読書こそが学問であり、実証と合理

性を重んじる科学的精神は、まっとうな学問とは認知されなかったのである。それゆえ、日本でも「明窓浄机」や「心身を清め、襟を正して読むべし」などという、精神訓めいた読書法のみが、日常茶飯に語られ、聖人の書物たる経書を、寝ころんで読むということは、学問をする者の態度としては、けしからぬものとして意識されたのである。かくして、書物を読むという行為は、なにがしか善なる行為、いや時には聖なる行為としてさえ意識され、常に奨励されることになった。文人や貴族は言うに及ばず、本来は武芸に励めばよいはずの武士階級においてさえも、読書は大切なたしなみの一つとなったのである。

現在においてもなお、中国ゆずりの読書観は残っている。現代に生きる我々自身においても、やはり読書という行為は、平凡だが安心感のある行いとして、好ましいものとして意識される。同じく趣味だとは言っても、読書は、テレビ鑑賞やパチンコを打つことなどとは異なって、依然としてかぐわしい教養の香りを放ち続けている。釣り書の趣味欄に書くには、現在でも最もふさわしいであろう。

また、実験やフィールドワークは補助的なものであり、読書を中心としたデスクワークこそが、本来の学問的方法であるとする考え方は、現代においても文科系の学者の一部などには、なお残存しているのではないだろうか。たしかに、最新鋭の機器を駆使した先端的な実験や、万里の彼方まで疾駆する壮大なフィールドワークは、いかにも現代的で華やかではあっても、なお伝統の浅さは否めない。保守的な学者魂からすれば、これらには、寒々としたともしびの下で、呻吟しながら聖人の教えを学びとる、求道的な姿勢にとぼしいのである。こうしたところに、読書が「聖人に近づくため」の手段であったなごりを見出すことは、あながち牽強付会ではないであろう。

だが、そうしたものよりも、試験漬けとなっている我々自身の姿を振り返ってみれば、中国ゆずりの読書観のなごりに、はっきりと気づくはずである。小は幼稚園の入園から大は大学の入学まで、さらには就職や昇進においても、

われわれの周囲には試験という関門がたくさん存在している。こうした各種の試験のために、我々は日々「○○概論」や「一般教養○○」の読誦を強いられている。しかも、こうした勉強が、その人の立身と関係しているという意味では、かつての科挙のために血道をあげた中国の読書人と、あまり変わるところがない。現代に生きる我々においても、「読書」という行為は、「勉強」とややその概念を変容させながらも、基本的にはやはり「経済的成功」へつづく捷径なのだ。

私は、孔子の言うごとく、読書はやはり究極的にはなんらかの意味で「銭になる」行為だと思う。「読書→聖人に近づく→経済的成功」と続く上昇階段は、基本的には現代でも通用するであろうし、また、読書して人格を陶冶し、しかもそれが経済的幸福に結びつくことは、あながち悪いこととは言えないだろう。お金は無いよりも、やはりあった方が良いと、気の小さな小市民である私などはとくに思うのだ。だが、堕落した儒者のように、この上昇階段から「聖人に近づく」ステップを踏みはずしては、せっかくの孔子の教えに背くことになってしまう。いや、別に孔子の教えに背いてもかまわないが、やはり何か不足する人間になってしまうのではないかと恐れる。単位を取るために「○○概論」を勉強したり、就職試験に合格するために「一般教養○○」を読誦したりすることだけが、その人の読書であっては、やはり人間性の面で問題が起こってくるのではなかろうか。

私は、現在において、中国風の「聖人に近づくため」の読書を復活させようと思っているわけでは、毛頭ない。だが、それと同時に、「聖人に近づくため」の読書が、現代において、まったく無意味で無価値なものだとも思っていない。世の中には、「聖人に近づける」要素を持った書物は、哲学書であれ小説であれ、やはり存在するはずである。中国の書物に限らず、世界において古典と称されている書物はなにがしか、そうした「聖人に近づける」要素を保証された書物なのだ。かの地の、聖人の定めた不変の真理を追究しようとしたすぐれた読書人のごとく、世界の古典を

敬虔な気持ちで読むことは、現代においてもまったく無価値なことではないであろう。

中国には「無用の用」という言葉がある。ここに大木がある。その木は実に大きなずうたいをしているが、まったく役にたたない。その木で舟を作れば沈んでしまうし、棺桶を作れば腐ってしまうし、柱に使えば虫が食ってしまうという、まったく役にたたない無用の大木だ。だが、役に立たないがために、他の木が次々と切り倒されてゆくのに、その木だけはいつまでも生き延びることができる。かくして、その木はますます大木となってゆく。『荘子』は、この役に立たない木こそが「無用の用」を持っていると述べ、次のように言う。「人　皆有用ノ用ヲ知ッテ、無用ノ用ヲ知ルコト莫シ」物外。人はみな、有用のものが役立つとは知っているが、一見無用と思われるものが、実は大きな有用性を持っていることに気がついていない、と。

現代において、「聖人に近づくため」の読書とは、この「無用の用」ではないだろうか。目前のせっぱつまった用を果たすことも、たしかに大切なことではある。だが、当面の試験を乗り切ることだけが、人生の目的ではない。人生にはやはり、すぐれし人間性を開拓する、中国風に言えば、徳性をみがくということも必要であろう。この「無用の用」は、すぐには役に立たないかもしれないが、逆にそれがために、かえって長い人生においては、貴重な有用性を持っているのではないか。すぐには役立たない、「聖人に近づくため」の無用の読書は、ひょっとすると、徳性をみがくという、目前の用足しとは比較にならぬ大きなプラスを、その人にもたらしてくれるかもしれないのである。

そうした観点よりすれば、この「聖人に近づくため」の読書も、けっして無駄なものとは言い切れないだろう。とくに将来のある青年諸君には、「○○概論」の読誦とともに（こうした読書も必要であることは、言うまでもない）、この、一見道草のごとく見える「無用の用」風の読書を、推奨したいと思う。「私は聖人に近づくために本を読んでいます」と堂々と答えることができ、周囲の人もそうした言葉を素直に受けとめる、そうした時代が再来することを、

私はひそかに願っているのである。

参考文献

・吉川幸次郎「支那人の古典とその生活」「中国の知識人」「士人の心理と生活」（全集第二巻）
・宮崎市定『科挙』
・宇野精一「儒教思想の本質」（全集第四巻）
・本田　済「聖人」（東洋思想研究）
・横田輝俊「八股文」（中国文化叢書四）

付記

編集者に督促されて、かかる駄文を草することになってしまった。このエッセイは、従来私が講義の中で雑談風に学生にしゃべっていたことを、この度思いたって文章化したものである。三千年の歴史を持つ中国の読書観がこれで尽くされたとは、もとより思っているわけではない。気楽な雑談だと思って、読みながしていただければ幸いである。